

平成 30 年 2 月 9 日 (金)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 鳴子イベント打合せ 凸版印刷との打合せ②

1、イベントの打合せ

3月9日、鳴子温泉にて凸版印刷(株)共催のトークイベントを開催します。

第1部はAIRの山村氏、TIRのマクミラン氏に、現在取り組んでおられる事柄について当館所蔵の資料を使いながら話していただくというもので、第2部は東北や温泉、旅といったテーマで、資料を提示しながら館長を交えて話していただくという内容です。

共催の凸版印刷の方々には、1月26日に1回目の打合で様々な資料をご覧いただき(日誌参照)、本日はそれを踏まえて第2部の流れを考えてゆきました。

このイベントのテーマは、古典籍と最新のデジタル技術のコラボレーションから、どのような表現や思想などが生まれるのかを、第一線で活躍するアーティストと翻訳家とともに考え、楽しむことです。

このイベントを企画するうえで、古典籍によってどのような旅ができるのかを考え、提案するのが私の仕事です。今回は、イベントの

¹ 江戸後期の滑稽本。式亭三馬作。北川美丸、歌川国直画。四編九冊。江戸町人の社交場でもあった銭湯での会話や老若男女さまざま

会場である鳴子温泉早稲田棧敷湯という公衆浴場の空間(場)を活かし、江戸時代の入浴文化についてご紹介できればと考えました。

2、江戸時代の入浴文化について

式亭三馬『浮世風呂』(図1)¹(文化6~10年(1809~13))で有名なように、江戸時代には銭湯文化があり、そこは近所の人たちとコミュニケーションを行う、生活に根付いた場所でした。しかし『浮世風呂』が書かれたのは19世紀初頭。それよりも前、たとえば江戸時代の初めはどのような入浴文化だったのでしょうか。



図
1

な人物像を活写して、庶民生活の種々相を浮きぼりにしている。請求記号：ナ 4-862-1~9

平成 30 年 2 月 9 日 (金)

江戸時代後期、自分たちの生きている時代よりも前、特に江戸時代前期～中期 (17～18 世紀) の文物について文献学的に検証を行う学問 (考証学) のブームが興り、その成果を随筆にまとめるという営為がありました。

近世後期の江戸戯作者・山東京伝 (1761～1816) も、考証に深い情熱を注いだひとりで、『近世奇跡考』・『骨董集』という考証随筆を刊行しているのですが、『骨董集』²に、100～200 年前の入浴文化について考察している項目があります。たしかに同じ江戸時代といえど、100 年以上前の時代の人々がどのような生活をしていたのか興味を湧くでしょうし、昔の絵画や文献を参照しなければ分からないことも多かったですね。

たとえば「江戸銭湯風呂の始」という項目では、寛永 18 年 (1641) 刊の『そぞろ物語』を引いて、「むかし江戸繁盛の始め、天正十九卯年の夏の比かとよ。伊勢与市といひしもの銭瓶橋のほとりに、銭湯風呂を一つ立る。風呂銭は永楽一銭なり。皆人めづらしき物哉とて入給ひぬ」と、天正 19 年 (1591) の頃には、すでに銭湯があったこと、入浴料が永楽一銭であったことを紹介しています。そしてその続きに「されども其比は風呂不鍛錬の人あまた有て、『あらあつの湯の雫や。息がつまりて物も言うはれず、煙にて目もあかれぬ』などと

²文化 10 年 (1813) 成立。上・中巻同 11 年、下巻同 12 年刊)

云て、風呂の口に立ふさがりぬる風呂を好みしが、今は町毎に風呂あり。びた十五銭廿銭づゝにて入也」と引用し、天正の頃は風呂に馴れていない人が多く、暑さが苦手で入り口に立っているのが好まれたこと、しかし寛永の頃になると、どの町にも風呂ができていることを示した上で、「これにて江戸に銭湯の始り古きことをしるべし」と述べています。

また、寛永～正保 (1624～1648) の頃のものだとされる、当時の人々が銭湯に出入りしている様を描いた古図 (図 2) を掲げ、当時の風俗について考えています。

図 2



請求記号 : 国文研三井, MY-1437-1

平成 30 年 2 月 9 日（金）

たとえば、図 2 の右端の男が持っている布に注目し、「此 奴僕^{しもべ}の持てるは、いはゆる風呂敷なり。当時は風呂の敷物なり。物を包む料となりても、風呂敷の名目残れり」と、この当時は風呂で敷物を用いており、それが現在のように物を包む布となっても、「風呂敷」という名前だけ残ったのだと、200 年程昔の風俗と、自分が生きている時代の生活とのつながりに想いを馳せているのです。

イベントではこのような資料を使い、入浴という文化を通して時空の旅をしていただけるよう準備を進めてゆきたいと思います。

3、イベントのテーマとタイトル

さて、この遠方に古典籍の実物を持ってはゆけません。そこで凸版印刷の VR 技術をお借りし、デジタル画像を見ながら話ができるようなツールを開発していただくことになりました。どうやら、当館の資料を撮影（アーカイブ）し、デジタル化することで、自在に拡大したり動かしたりすることができるようになるそうです。

冒頭でも書いたように、このイベントは、古典籍とデジタル技術がコラボレーションすることで何が生まれるのかを考えることをテーマとしています。今回は鳴子という土地で、「ないじえる芸術共創ラボ」で生まれてくるアートについて語る。これらの主旨を凝縮しようと、館長をはじめ皆でアイデアを出し合い、「デジタル発 和

書の旅 湯とアートが鳴子で出会う」というタイトルが決定しました。勿論、「和書の旅」には、時間と空間どちらの旅もできるという意味が含まれています。

各パートで着々と準備が進んでいます。当日はどのような旅ができるのでしょうか。